NPO日本朗読文化協会

朗読ニュース

2015年夏号

開場・博品館ロビー

声あそび

第十三回「朗読の日」

「元気の出る漢詩～加賀美教室～」

Voicek「口紅のとき」

Aステージ

城所ひとみ

司会　飯島晶子

長野淳子

塩田睦子

阿部俐奈

照井恒衛

ぐるーぷ　ＳＨＯＷＡ

植田聖子

松島邦

岩瀬弥永子

浅霧ひとみ

飯干大嵩

伊藤富美子

フィナーレ

Bステージ

司会　長野淳子

川合正美

関まさ子

中村美智子

早川とし子

那須俊子

稲本由美子

髙梨芳子

三上実枝子

田中邦子

安倍眞壽美

加賀美教室Ｉ

フィナーレ

「朗読の日」アンケート（出演者・お手伝い等 23 名より）

出演してのご感想またはお手伝いについて

・2 回目の出演、そしてお手伝いと楽しく参加。朗読を通しての友人知人の輪が広がったように感じる。ご来場のお客様からも嬉しい感想が届き、大きなステージに出演させていただいた充実感を味わった。

・これまで 13 回続けて来てくれている方々の中から、どんどん、どの作品も楽しくなり引き込まれて眠くなる時間もない（笑）とお褒めの言葉をいただいた。朗読をやってみたいというメールもいただいた。チケットは自信を持って販売してもいいのではないか？

・出演者の作品選びはセンスが良いなと思った。笑える物、感動する物、涙を禁じえない物、ほほえましい物、楽しめるプログラムだった。

今回の「朗読の日」公演事業についてのご意見

・2 ステージ見た方からも、どれも楽しかった、面白かったという評判が多かった。バラエティがあって面白かったという声も多かったが、一方で、まだこの舞台に出るには早いのではと思う人がいたという厳しい意見もあった。コンセプトとして協会のお祭りだから全員が協力するという意味で誰でも出て読むべきとするのか、三千円の入場料を取るＮＰＯ日本朗読文化協会主催の公演に見合うグレードの出演者が出るべきとすべきなのか決め難い。博品館は、出演を努力目標として掲げる場所だと思うが、収支の点で…複雑な思いがする。

・出演希望者を全員舞台にというのは基本だと思うが、講師の朗読も「朗読の日」に加えたらどうか。「朗読の日」あってこその朗読教室だし、その他の講座も朗読を深める為のもの。声あそびで児玉先生を知っているが、他の講師の朗読は博品館で聴くことが出来ない。地方会員は、講座を受ける機会がないので「朗読の日」に参加してほしい。

・ハリウッドスタッフの感じが非常によく、朗読内容にあったメイクを考えてくださって嬉しかった。普段の自分と違った世界に入れて楽しかった。

・5 回位でマンネリは避けられないと思う。皆で大幅な見直しをしても良いのでは？演出もいろんな案があると思うし、個人の朗読会で集客力のある在籍の長い出演者も多くいる。新しい試みは必要かと思う。

・なぜ出演者が少なくなったかという問題はある。まずは参加費。高い参加費を払って出ても 10 分、せいぜい 15 分。それも読みたいものが読めるとは限らない。数年前と違って皆、技術が向上してるので、自分で企画して希望する作品を長く読みたいから博品館には出ないという事だった。以前のように何かバリューが欲しい気もする。

・リハーサル毎の演出からのアドバイス、効果音、照明などが的確で、素敵だった。去年より音楽などの演出が素晴らしかったとの声があった。

「朗読の日」チケットの販売数の増加対策について

・チケット販売は大切。あのチラシはとても良いが、出演者を知らない人も興味を持ってもらえるチラシに改善したらどうか。各ステージの「売り」を１つか２つ。行ってみようと思えるように載せる。ＨＰも同様。

・広報が大事だと思う。ＨＰに判り易く、どんどん出す。ＨＰから注文すると特典（1 割引、プログラム進呈等）をつけるなど。有名新聞はもちろん、無料の地域新聞等にも紹介記事を出してもらう。演目名をだすのも良い。
郵便局の置きチラシもお客様がきた。場所を選び、郵便局と言う新しいポイントにチラシを置いてもらう。

事務局から

・来年度は試験的に指定席にすることを提案したい（会員からも提案あり）。反省会で大多数の皆様より指定席賛成の声もありましたので、実行委員会で実施検討予定です。

・「朗読の日」の目的等基本問題・上記アンケートを含む諸問題の解決案および収支改善等について運営委員会で選ばれた 8 名の会員で検討します。１０月までに皆様へ報告予定です。

Cステージ

司会　安倍眞壽美

中村悦子

市原タツ子

松下光子

林たのし

青木ひろこ

茂呂久美子

土屋久美子

飯島晶子

杵屋淨貢

Voicek

学生ぐるーぷカタクリコ

フィナーレ

Dステージ

司会　稲本由美子

鶴田佳子

和田幸子

菊地崇之

加賀美教室Ⅱ

伊吹よし子

永沢淳美

臼田敦子

吉田菊子

小川弘子

フィナーレ

大活躍しました・東京新聞

第 13 回「朗読の日」を 4 日後に控えた 6 月 16 日夕方電車の中で私の携帯が鳴った。慌てて降りた駅のベンチで掛け直したら先日来「朗読の日」の取材をお願いしている東京新聞社会部の記者の方だった。「お知らせ」でよいなら今からでもできる。それから 30 分、今年入社したばかりという記者の方は熱心に私の話を聞いて下さった。そして本番前日 19 日朝刊都心版にお知らせではなく予想外の大きな記事が掲載され、その瑞々しい文章に惹かれた読者より朗読協会事務局の問い合わせ電話は鳴りっぱなしに！夜の 8 時頃まで！そして記事で紹介された加賀美先生・元気が出る漢詩 B&D ステージへ熱心な聴衆が詰め掛けた。(広報担当)

あす・あさって　銀座・博品館劇場

バラエティー豊か
朗読を楽しむ催し

小説や詩の一節を音読し、言葉の豊かさを観客に味わってもらう舞台「朗読の日」が二十、二十一の両日、中央区銀座の博品館劇場で開かれる。NPO法人日本朗読文化協会（港区）が語呂合わせで決めた十九日の「朗読の日」にちなんで毎年実施しており、今年で十三回目。

二日間とも、アナウンサーで協会の朗読名誉会長を務める加賀美幸子さんのグループがトリを務める。「切磋琢磨」「井の中のかわず」など、日本語に定着した言葉の元の漢詩を読み下し文と現代語訳で朗読し、合間に加賀美さんの語りが入る。

「国破れて山河あり」のようにさみしさを感じさせる詩も入るが、昔の歌人の視点の雄大さやユーモアに、読み手、聞き手とも日常のうさを忘れて元気になれるプログラムだ。

ほかに、東日本大震災の津波で消防団員の息子を亡くした母親がつくった絵本「ハナミズキのみち」や、源氏物語、藤沢周平の時代小説など、バラエティー豊かな演目が用意されている。

両日とも昼の部が午前十一時から、夜の部が午後四時から。各部とも三千円で全席自由。問い合わせは、協会＝電03（3584）4451＝へ。（柏崎智子）

『朗読の日』ご挨拶

城所ひとみ

「朗読の日」も盛会の内に終わることが出来ました。「朗読の日」が 1 年の大きなイベントであり、これが無事終了して初めて NPO 日本朗読文化協会の 1 年間が終わり、そしてその次の年が始まると言うことです。今年は特にお客様の声の中で聞えて来たのは「あらゆるジャンルの作品が上手に組み合わされて、全く退屈することなく、ステージに魅せられていた」とのことです。これは演出家飯田氏の力と同時に、出演者が多くの作品の中からしっかりと博品館のステージで読むに一番最適な作品を選んでいたかということですし、又かなり多くのジャンルから作品が出てきたということです。つまり出演者がどんどんレベルが高くなっているということでもあるのです。博品館の「朗読の日」と共に NPO 日本朗読文化協会、会員が成長してきているということです。大きな舞台というのはそれだけの意義があるのですね。今年はしっかりと反省会をし、今後の方針を検討していくことになりました。出演者、スタッフとしてのご協力をしてくださった皆様に心からお礼申し上げます。

飯田輝雄

第 13 回「朗読の日」も無事終了。お疲れ様でした。初舞台の方、遠くから参加の方、学生グループ、80 歳以上の高齢の大ベテラン、加賀美教室の皆さん・・・延べ 88 人の参加で 42 作品を発表するバラエティに富んだ公演になりました。表方また裏方で協力していただいた皆さん！本当に有難うございました。ただ今回は「朗読の日」の主旨（朗読の普及・日頃の成果の発表の場・朗読協会にとっても大切なＰＲの場 etc）が今一つ徹底しなかったためかステージによりお客様の入りに少々バラつきがあったのが残念でした。これからも少しでも多くの方に来ていただき、見ていただき、聞いていただき、楽しんでいただけるイベントになればと思っています。朗読を楽しみながら勉強しましょう！皆でがんばりましょう！

初出演を終えて

憧れの作品を朗読して・・・

伊藤富美子

「ラヴ・ユー・フォーエバー」は、私自身が大変感動した作品で、以前からいつか朗読の日の舞台で朗読したいと思っていました。今回、念願が叶って感慨無量です。「朗読すること」について、加賀美先生の講座や飯田先生の講座でたくさんのことを教えていただきました。両先生を初め、素敵な舞台を作って下さった皆様に大変感謝しております。有難うございました。

『南極のペンギン』より高倉健「沖縄の運動会」

松下光子

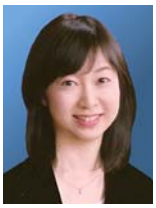
いつか「朗読の日」の舞台にという願いが現実となりました。初参加で不安尽きぬ中、本読みに参加する度、演出家の御指導、実行委員の方々の細やかなアドバイス頂き感謝しております。当日、大勢のお客様の前で朗読させて頂けたことは、私には貴重な経験となり、また舞台の成功を支えるパワーも学ばせて頂きました。本当に有り難うございました。

「雨の日」竹西寛子

関まさ子

第 1 回本読みの日が一番緊張しました。現代文の朗読発表ははじめてで、不安もありましたが、ある方から、心のひだを感じ、切迫している貧しさに思いいたらなかった主人公の心情がすごく伝わってきた、と評していただきほっとしています。ご指導下さいました演出家飯田先生、教室の先生他、全ての方々に感謝いたします。参加できたこと、大変光栄でした。

「若草物語」ルイザ・メイ・オルコット



吉田菊子

「若草物語」からのワンシーンを、心を込めて朗読しました。姉妹たちとその母との深く結ばれた愛や、様々に変化する思いを、お客さまに伝えることができるよう、練習を重ねました。物語の筋や時代背景を考え、声の表情、語る速さ、間の取り方、息の使い方を工夫するのは楽しく、勉強になりました。ステージではお客さまとの一体感を味わい、とても幸せでした。

『男どき女どき』より「ゆでたまご」向田邦子

永沢淳美

いつも通りの日常が戻り、今振り返ると発表の日迄、何という疾風怒濤の日々だった事でしょう！当日の参加も危ぶまれる程、様々な事が次々に起こり不安な日々でした。練習不足は否めなかったけれど、最後は神様はチョットだけ微笑んでくれたでしょうか。向田作品と加賀美先生との漢詩は、感謝の思いと共にいつまでも心に刻まれる事でしょう。皆さまの情熱にも感動でした。有難うございました。

『南極のペンギン』より高倉健
「ふるさとのおかあさん」

林たのし

第 1 回目の本読み、それは雪による飛行機の遅延から始まった。その後の本読み→ゲネプロ→本番→会終了後の後片付けと経験。たった 5 分の作品にアップアップしていた私がいる一方で計画、準備をし会を支えて下さった方々に頭が下がりました。「朗読の日」初見参の感想はお客様、会を支えて下さった方々に感謝と、楽しい朗読経験が出来た事です。ありがとうございました。

活動報告

第２回チャリティー朗読会　2015年３月８日

協会主催の「第２回チャリティー朗読会」が、去る３月８日（日）赤坂区民センターホールで行われました。細やかでも、息長く、東日本大震災で親を亡くした子どもたちを支援していこうという協会会員の気持ちに賛同してくださる方々にご来場いただき、満員の盛況。箏演奏と朗読を楽しみながら、支援にご協力いただきました。

今回は、生田流箏曲・学術博士安藤政輝氏とその一門の方々のご協力を得て、「箏と朗読による宮城道雄の世界」。プログラムは２部に分かれており、第１部は知っているようで知らない「日本の音楽、その歴史と箏」安藤先生の演奏を交えながらのお話、第２部は「宮城道雄の世界」と題して、宮城道雄作曲の箏曲演奏、また、随筆家としての宮城道雄の一面を協会講師による随筆朗読と箏のコラボレーションで楽しんで頂きました。澄み渡る箏の音、珠玉の随筆の数々、そしてご来場だけでなく義援金にも多くの寄付を頂き、皆様に感謝の春の日の一日でした。

当日の利益金及び皆様からご寄付頂きました義援金は、あしなが育英会を通じて、東日本震災遺児支援として寄付させていただきました。

〈チャリティー朗読会実行委員長　阿部俐奈〉

「ナザレ園」歌と朗読お楽しみ会　2015年５月10日

韓国南部、かつての新羅の都慶州、日本の奈良のような、歴史の古い文化遺産に恵まれた観光地の一角に、日本人女性の為の老人ホーム「ナザレ園」はあります。朝鮮半島が日本の植民地だったころ現地の男性と結婚し、戦後もこの地で暮らしている日本人妻の方々が安らぎの日々を送っているのです。

麻布十番「朗読の森」では今年は大人クラスが訪問することになりました。今は24人の女性が園で暮らしています。最高齢の方が100歳、平均年齢91歳と聞いていましたが、お楽しみ会の会場の明るいホールで待っていた方々は11人はピンクの花がらのＴシャツやブラウスなどでオシャレした元気で若々しいお姉さま方でした。

「何処からきたの、東京？私も東京なのよ、じゃあ、貴方は私の妹ね」など、楽しい会話が弾み帰りの時間は名残惜しくて涙がでました。楽しい事ばかりでは無い筈ですが力強く生き抜いている皆様に勇気と元気を頂いたナザレ園訪問でした。

〈朗読講師：松森世津子・宮内佳代子〉

児玉朗・演出による朗読とピアノで語る『ベアテ若き日のエポック』　2015年４月18日・19日　於・内幸町ホール

朗読力レベルアップを目的として企画した公演であったが、全員が一丸となり成功に向けて頑張ることができた。目的はほぼ達成されたと思っている。これまでの朗読会とは全く異なる題材のため、集客に関しては心配はあったが、皆の努力と、新聞社等の取材もあり、数紙に掲載された効果か、予想以上の反響があり、チケットも完売となった（4ステージとも満席総入場者数750名）。NPOとして、このような社会性のある作品を取りあげていくことは、協会にとっても意味あることではないかと強く感じた。

〈児玉朗特別公演製作委員会〉